

新島 襄の「靈魂の病」

大 越 哲 仁

はじめに

私は本誌前号の拙論（「新島襄のキリスト論」）において、キリスト教信仰の中心におられるイエス・キリストに関する新島の思想、特に、イエス・キリストは誰であるか、という問題についての新島の神学的な考え方の主要な部分を明らかにした。

一方、前回の拙論冒頭で述べたように、キリスト論には、このようなキリストはだれか、という議論とともに、キリストの意義、特に人類にとっての意義という神学的な意味と、あわせて、新島自身にとってのキリストの意義、すなわち、キリストは新島にとってどういう存在なのか、という実存的意味を論じる必要がある¹⁾。もとよりこれは、キリストによる救済の理論（soteriology）の解明である。

そこで、これから私は、キリストの救済論に対する新島の思想を明らかにし、新島神学探求の旅をさらに続けて行きたい。

ただし、ページ数の関係で、今回は、新島のある一つの演説稿を取り上げ、それを通して、新島が人間の罪というものをどう考えていたのか解明してゆきたい。救済論は人間の罪が前提になるからである。

「靈魂の病」もう一つのMy Younger Days

新島は自分の半生を回想した自伝的な記録をいくつか残しているが、その中で主要なものが「私の青春時代（“My Younger Days”）」²⁾と「脱国の理由書」³⁾として知られる2編の英文の文章である。

今回はもう一つ、キリスト教に出会う以前の放蕩三昧の自分を告白し、その後、キリスト教に出会って回心し、伝道に勤しむ現在に至るまでの自分の精神遍歴を明け透けに語る演説稿を紹介したい。新島全集2（宗教編）に収録され、同書編集者によって〔靈魂ノ病〕と仮題を付されたものである⁴⁾。

それは、キリスト教に出会う前の新島に対して我々が抱く、勉学に励んでいた真面目な青年、というイメージを覆すものであって、青春時代の新島の知られざる一面を示すものである。いわば、もうひとつの“*My Younger Days*”と言っても良いものである。

まずはその演説稿を読み解いてゆこう。

演説稿の冒頭、新島は、自らを語る前に「昔時東京ニーノ不幸ナル人」がいた話をする。

それは次のような話である。

昔、東京に「不幸ナル人」がいて、幼い時から種々様々「実ニ名状スベカラサル程ノ持病」に苦しみ、全治することを求めて、府下の名高い医者 を 尽 く 回 っ て 診 察 を 受 け、針、揉み治療はもちろん、温泉にも行き、加持祈禱も試み、府下の神社仏閣をはじめとして伊勢にも善光寺にも参詣するなど百方手を尽くしたが何の効能もなく、一人鬱々としていたところ、「突然、何ノ〇〇トカ申蘭法医〔蘭方医〕が「横丁」にやってきた。そこで、近傍の人々の勧めもあってこの医者に掛かろうとしたところ、この蘭方医は「平常豚ノ肉ヲ喰スル」事を聞きつけて大いに驚き甚だ嫌い、神様の前に穢れるからこの医者を見るのも嫌だと診察を受けずにいた。しかし、この「豚喰医者」の評判が段々上がってきて「如何ナル病氣テモ治ス」といわれるようになったために恐々この医者の診察を受け薬ももらってきたが、自宅に帰ったときは直ぐに門戸に入らず、「火ヲ打カケ塩ヲフリカケ己ノ総身ヲ清メテ」から入ったという始末は「実ニ抱腹ノ至」であった。彼はこれほどの「頑固物〔者〕」だったが、薬を飲むうちに効果が顕れ、数ヶ月を経ないうちに健康の身となった。そこで彼は、早いうちにこの医者に掛かったならば「是迄ノ信神、願懸、湯治、針アンマ等」に莫大な金を費

やさなかつたものを、と後悔して「大ニ神仏ニ不足ヲ云レ、蘭法医テナケレハ病氣ハナオラス」と思い込み、その効能をさまざま申し立ておおいに吹聴したので、「其ヨリ府下ニ蘭法医ノ名カ揚カリ」、「其時ヨリ西洋医カ益盛ニナリ」遂に「今日ノ〔西洋医学全盛の〕結果」を見るに至った、という話である。

それから続けて、新島は自身を語り始める。

却説⁵⁾、私モ諸病ノ間屋タリシ彼東京人ノ類イテアリマシテ、身体ノ病ハサテオキ私ノ靈魂ニ罪ト云大ナル病氣カアツテ、何事ヲ不論、事ニ臨ミサヘスレハ此病氣カ発シタリ、去レトモ其時ニハ病氣タルヲモ不知、随分人ヨリハ正シキ者ナリト誤テ自評ヲ下シ居リマシタカ、唯今回顧スレハ乃チ豪漫〔傲慢〕飾非偽善、嫉妬憎悪、放蕩淫乱実ニ慚愧ニ堪ヘサル程ノ大患也

新島は、自分も「諸病ノ間屋」であったその東京人のたぐいであつて、身体の病はさておいても、自分の靈魂に「罪」という大なる病氣があつて、どんな場合でも、いつもこれが発病した。しかし、その時は自分は病氣であったことを知らなかつたので、他人より自分は随分正しい者だと自認していたけれども、今、回顧してみれば、傲慢偽善で悪いところを取りつくり、他人に嫉妬や憎悪を抱き、放蕩淫乱を尽くしていた当時の自分に対して実に慚愧に堪えない、それほど自分の罪は深刻な病であつたのだ、と告白するのである。

これは相当ショッキングな新島の告白である。「顕彰」派の新島研究者⁶⁾であれば、この新島の告白は無視するか、あるいは、この告白自体、本当は事実ではない、と主張するところであろう。

たしかに、この演説稿には、「横丁」にやってきた「豚喰医者」や「火ヲ打カケ塩ヲフリカケ己ノ総身ヲ清メテ」家に入る「頑固物」の様子が「抱腹の至」であることなど、聴衆を意識したユーモラスな修辞が見られる。しかし、だからといって、聴衆受けをねらつて、自分が「放蕩淫乱」を尽くしたなどと言うであらうか。ただし、ここではこれ以上踏み込まず、新

島の告白の真偽の検討は後に譲って先に進むことにする。

如斯キ病氣ニ染マリタレハ必ラス之ガ治療ヲ求ムヘキニ、不幸ニシテ己ノ病カ氣カ付カス、又良医モナク、随テ良薬モナキ時代ニ生長シタレハ、靈魂ノ病ハ日々ニ重モク説法トカ講釈トカ云テモ少シモ効ヲ不発、説法ヲ聞ケハ直ニ眠ヲ催シ、又論孟ノ講釈ヲ聞ハ彼ノ聞トキ聞エスノ輩ニシテ、依然タル論語読ノ論語不知テ永キ月日ヲ消費シマシタケレトモ、フト耶蘇教ノ書物ニ見当リ、是コソ平生憎ム所ノキリシタン宗門ナルヘケレ、再三復読沈思熟考必ラス其ノ非ヲ看破シテ呉ヘシト鑿意之ヲ読破セシニ、兼テノ想像トハ大イニ違ヒ、宇宙ノ造物主宰ヲ説キ来リ、又人類ニ罪ト云病アルヲ論、且之ヲ癒スヘキ大能力ヲ具有セル耶蘇基督アルヲ説キ来リ、大ニ私ノ心中ニ疑問ヲ起サシメ、必ラス此ハ穿鑿スヘキ事ナルヘシト思ワシメタリ

続けて新島は、自分は、「罪」という病気に罹っている以上、この治療を求めるべきであったのに、不幸にして自己の病気につかず、またそれを治す良医も無く、良薬も無い時代に成長していったので「靈魂ノ病」は日に日に重くなっていった、と述べる。寺で僧侶の説法を聞けば、直ちに眠気を催すような有様で、「論語」や「孟子」など儒教の經典書物に書いてあることは学んでも実行が伴わない「論語読みの論語知らず」の状況であった。

新島は続けて、そんなときに「フト耶蘇教ノ書物ニ見当リ」、たまたまキリスト教の書物に出会ったことを述べるが、その出会い方もまた我々が今まで知らなかった驚くべき出会いであった。

すなわち、新島はキリスト教の書物に対して「是コソ平生憎ム所ノキリシタン宗門ナルヘケレ、再三復読沈思熟考必ラス其ノ非ヲ看破シテ呉ヘシ」、ふだん自分が憎んでいたキリスト教だから、何度も繰り返して読み、十分に熟慮して、必ずキリスト教の間違いを見破ってやろう、と考えて読み始めた、というのである。

キリスト教の書物と出会う前、新島が、常々キリスト教を憎んでいて、その書物を読んだ動機も「其ノ非ヲ看破シテ呉ヘシ」と考えたからだ、と

いうことは新島が書いた他の文書や従来の新島伝では、私が調べた限り一切述べられていない。本当なのだろうか。その検討も後に譲りたい。

さて、新島が鋭意その書物を読破してみると、読む以前の想像とは大いに異なっていた。キリスト教の書物は彼に「宇宙ノ造物主宰〔創造主〕」を説いてくれ、また、人類に罪という病があることを論じ、かつ、この病を癒してくれる大能力を具有する「耶蘇基督〔イエス・キリスト〕」がいることを説いてくれた、それらのことは、自分の心中に疑問を起こし、キリスト教は必ず穿鑿すべきものであると考えさせられた、というのである。

それから新島は次のように述べて演説稿を終える。

其ヨリ段々ト此宇宙ノ主宰ヲ探索シタキ了簡カ生シ、又五大洲ヲ跋涉シタシキ志願カ発シ、米國迄飛出シテ彼國ノ耶蘇教信法ニ接シ自ラ耶蘇教ノ學校ニ入り学ヒ、米國ハ勿論欧州ノ國ニモ経歴シテ、耶蘇教ノ行ル、國ト行レサル國トヲ比較シ、又英米諸國ニ耶蘇信徒ニシテ頗社会ヲ益シ國家ヲ利スルノ輩陸續輩出スルヲ目撃シ、又歴史上ニ昭々乎トシ明ナルヲ見、實ニ耶蘇教ハ社会ヲ救フヘキ真理天道ナルヲ發明シ、帰朝ノ後教友ト力ヲ協セ此道ヲ弘布セン事ヲ計リマシタハ外テハナイ、此教カ能ク人間ノ心ニ適當シ又人間ノ靈魂ヲ医シ、我輩ヲシテ人間ノ本位ニ復セシムル天啓教ナルヲ確信シ、又自身ニ蒙リタル利益ノ甚多キヲ感シ、之ヲ弘ク社会ニ分与セント欲シ、不肖ヲ不顧不学ヲモ不問、断乎トシテ諸彦ノ前ニ出テ喋々スルハ、諸彦中若シ予ト同様ニ靈魂ノ病氣アル御方アラハ、直ニ耶蘇教ニ就キ心ノ療治セラ〔レ〕ン事ヲ企図スル事甚懇切ナリ

この節の冒頭、「其ヨリ段々ト此宇宙ノ主宰ヲ探索シタキ了簡カ生シ、又五大洲ヲ跋涉シタシキ志願カ発シ」という部分は、新島自身が語った脱国の理由として、他の文書とはニュアンスの異なる点で非常に重要である。

従来から我々が知る、新島自らの言葉としての自身の脱国の動機は、キリスト教をもっと学ぶため、とするものである⁷⁾。たとえば、「脱国の理由

書」では、英語の聖書を読むために箱館に行ったが、同地で適当な英語の教師を見つけられなかったために一転して国外脱出を考えるようになった、と述べているし、「私の青春時代」では、キリスト教に関する多くの疑問点について説明を受けるために外国人宣教師たちが自由に福音を述べ伝えていた土地を訪ねるため、と述べている⁸⁾。

本文でも、自分はキリスト教の本を読んで、心中に疑問が起こった、キリスト教はもっと穿鑿すべきものであり、自分は「宇宙ノ主宰」をもっと探求したいという気持ちが起こった、と述べているところは、これらの文書と同じである。しかし、この文章は、自分はキリスト教を論駁しようとしてその書物を読んだが、その内容は「兼テノ想像トハ大イニ違」っていた、という文脈の中で捉えるべきである。そうすると、「宇宙ノ主宰ヲ探索シタキ了簡カ生シ、又五大洲ヲ跋涉シタシキ志願カ発シ」という言葉の意味が変わり、特にこの文の後半部分に、新島の熱い思いが伝わってくる。

すなわちこの文章は、この広い世界には、キリスト教のように、自分が思い込んでいるものと異なる事が沢山あるに違いない、だから、キリスト教の神を探求したい考えも生じ、さらにまた、世界の五大大陸を巡り歩いて、自分が知ったつもりでいても本当はほとんど知らない様々な事を見聞してみたい、という希望も起こった、そういうように読み取るべきなのである。

ただし、この解釈が可能となるのは、キリスト教に出会う前、新島がそれを「平生憎ム所」と考えていたことが前提となる。その真偽は、繰り返しとなるが後に譲りたい。

さて、この演説稿全体に貫く新島のキリスト教思想の特徴は、彼が罪を病に例え、キリスト教による救済を医者や医療に例えていることである。

そして、新島は、キリスト教に出会う前の自分は、自分の「靈魂の病」である罪を自覚せず、自分が病んでいることを知らなかったために、自分は他人より随分正しい人間だと自負しながら「豪漫飾非偽善、嫉妬憎悪、放蕩淫乱」を重ねていったと回想する。ところが、キリスト教に出会って後、それ以前の自分を振り返ると「慙愧ニ堪ヘサル程ノ大患」であった、

と振り返る。それは、キリスト教に出会ってから、罪とは何なのかが分かったからである。

罪を病に例え、キリストによる救済を医師による癒しと例えるのは、新約聖書でしばしば語られるものである⁹⁾。新島もまた、キリスト教に出会い、罪の何たるかを知って愕然とするが、キリスト教はそんな罪深い自分の「心ノ療治」をしてくれ、「我輩ヲシテ人間ノ本位ニ復」してくれた、と考える。

新島はアメリカでキリスト教を学び、また岩倉使節団の一員としてヨーロッパの国も巡って「耶蘇教ノ行ル、国ト行レサル国トヲ比較シ、又英米諸国ニ耶蘇信徒ニシテ頗社会ヲ益シ国家ヲ利スルノ輩陸続輩出スルヲ目撃」して、「実ニ耶蘇教ハ社会ヲ救フヘキ真理天道」であることを悟ったが、それは決して、社会や国家におけるキリスト教の機能の重要性という社会政策的な認識に止まるものではなかった。

それよりも彼にとって極めて重要なことは、自分がキリスト教に回心したことにより、自身の靈魂が癒され、自己を「人間ノ本位」に復すことができたことである。このようにキリスト教によって自分「自身ニ蒙リタル利益ノ甚多キ」ことを実感したために、新島はこの利益を広く社会にも分与したいと考えたのである。

ここに福音主義者新島の真面目がある。

「不幸ナル人」と「豚喰医者」

ところで、以上の新島の演説稿は、既述したとおり、我々が知らなかった新島の心情が重要なモチーフになっている。それは、キリスト教の書物に出会った新島が、それを「平生憎ム所ノキリシタン宗門ナルヘケレ、再三復読沈思熟考必ラス其ノ非ヲ看破シテ呉ヘシ」と考えて読み始めたことである。

はたしてこの動機の話は本当であろうか、あるいは、演説を面白くするための新島の脚色であろうか。

このことは、「脱国の理由書」と「私の青春時代」には一切触れられてい

ない。いずれも、友人が持っていたキリスト教の書物を借りた事実が述べられているだけである¹⁰⁾。

新島のキリスト教の書物を読もうとした動機について、この演説稿で彼が述べたことが正しいのかどうか判断するには、まず、演説で述べられた他の記述の信憑性も検討する必要がある。他の部分にそれを欠けば、この部分の記述もあまり信頼を置く事が出来ないからである。

そこでまず問題になるのは、演説冒頭の「昔時東京ニーノ不幸ナル人アリ」という話である。この話は本当にあったことであろうか。

私の結論から先に述べれば、この話は、新島に多少の誇張があるかもしれないが、内容的にはきちんとした出典がある話であって、「不幸ナル人」を治療した「豚喰医者」とは、松本良順のことでまず間違いが無いであろう、ということである。

その根拠だが、まず、この文章が聴衆を前にした演説の原稿であることである。演説であれば、当然ながら、会場の内外の別があるとしても聴衆から質問が出るのが想定される、特に、この枕話を聞いて誰でも興味を湧くのは、「不幸ナル人」や「豚喰医者」が誰か、ということであって、新島は当然、本当の話として、その答えを用意して演説に臨んでいるはずである。実はそんな人は存在せず、これは自分の作り話だ、と答えたとすれば、本題はおろか、演説者の新島も相手にされなくなる、心の病である人間の罪の話をして福音を述べる演説で、そんな聴衆を馬鹿にした罪作りの話を彼がするはずはない。

それでは、「不幸ナル人」を治療した「豚喰医者」がなぜ松本良順なのか、という根拠だが、私は以下の3つを指摘したい。

まずは、松本のプロフィールである。

松本良順¹¹⁾は、佐倉藩医で順天堂医学塾（今の順天堂大学）をつくった佐藤泰然の次男として生まれ、松本良甫の養子となる。彼は長崎のポンペの下で西洋医学を修得した後、幕府が西洋医学の専攻機関としてつくった医学所の頭取となり、日本屈指の蘭方医となった。彼はまた、幕末の京都で新撰組屯所の衛生を指導し、隊士に残飯を利用して豚を飼い、豚肉を食

することによって滋養をつけるよう勧める。さらに、戊辰戦争では会津藩に応援に行き、同藩の藩士の治療に当たりながら牛肉食を奨励している。他人に豚喰いを勧めた以上、松本自身も当然、「豚喰」を行ったはずである。また当時、日本人には一部の地域を除いて獣肉を食する習慣が無く、新撰組隊士も会津藩士も肉を食することを嫌がったが、松本はいずれもトップの近藤勇と松平容保に説いて彼らに食させている。しかし、おそらく彼は隊士や藩士の一部から「豚喰いを強いる医者」として嫌がられたと考えられる。

維新後の1870（明治3）年、松本は、現在の地下鉄早稲田駅近く、穴八幡の脇の八幡通りという、まさに「横丁」に蘭疇舎¹²という洋式の私立病院を開業する。この病院は、大学東校（東京大学医学部の前身）の教授となった松本の医学所時代の仲間も嫉妬するほど立派なものであった。

この病院で松本は患者に対して牛乳の飲用を奨励したが、それは、彼としては本来、病氣回復には豚肉などの滋養豊かな食物を食べさせたかったけれども、当時、獣肉を口にするのは汚らわしいことと忌み嫌う風潮があったために、患者にそれを強いるわけにはゆかないと判断したからだという¹³。この話は、彼が豚肉食を奨励していることを患者が知っていて、かつ患者がそれを嫌がっていたことを松本自身が理解していたことを示す傍証であろう。

なお、当時の日本人には牛乳を飲む習慣さえも無く、なかなか一般には普及しなかったが、松本は自分の患者だった歌舞伎役者の市川団十郎に牛乳の効能を説き、常用してもらうことをきっかけに日本で牛乳の飲用が普及することになった。

日本で西洋医学に基づく医制が制定されたのは、松本の蘭疇舎開業から4年も遅れた1874（明治7）年であって、その当時でさえ、開業医10人のうち8、9人は漢方医という状態であった。松本の西洋医療の実践は極めて先駆的なものなのであった。

新島が、当初「豚喰医者」を嫌った東京人が、完治後に彼の医学の効能をおおいに吹聴したために、「其ヨリ府下ニ蘭法医ノ名カ揚カリ」、「其時ヨリ西洋医カ益盛ニ」なった、と述べたことは、以上のような、松本の努力

によって西洋医学の考え方が日本人に理解されるようになったことを指しているように思える。

ところで、この蘭方医に掛かった「不幸ナル人物」は誰であろうか。この人物に関して、現時点それが誰かは特定できていないが、このような人物は当時、病を持つ日本人として典型的な人物であって、後述のように、彼を診察した松本自身が、なんらかのときに周辺の者にこの人物の話をしたと考えられる。

医制が制定された1874年、教部省が、医療や服薬を妨害する故をもって禁厭（まじない）や祈祷（おはらい）の取締りを命じる達しを発している¹⁴⁾。これは当時、患者の間で加持祈祷を含めた民間療法が盛んであったことを示すものである。加持祈祷による病気の治癒を信じる仏教信者が豚喰を恐ろしいほど嫌うことは至極納得できる。

二つ目の根拠だが、新島が演説稿でこの医者をつ「○○トカ申ス蘭法医」と伏せ字で表したことである。本来は、この人物を本名で紹介した方が聴衆に信憑性を与えるのにもかかわらず、彼があえて伏せ字にした理由は、演説稿という文書に名前を記録しておくには支障のある人物だからであろう。新島は、社会的地位の高い人物について文章に残す場合、「○○伯」¹⁵⁾のように、名前を伏せ字にすることがままあった。

そうすると、この「○○トカ申ス蘭方医」は、皆が知っている著名で社会的に地位の高い人物であって、名前を挙げると憚られる人物であるように考えられる。

明治初期の東京における蘭方医で自ら病院を経営し、さらに一般の者も良く知る有名な人物とすると範囲が非常に限られる。

矢田挿雲は名著『江戸から東京へ』で、幕末、幕府の西洋医学所（1861年に種痘所から改称。1863年に医学所と改称）に関わった人物として、大槻俊斎、伊東玄朴、伊東貫斎、戸塚静海、竹内玄同、林洞海、桂川甫周、松本良甫、吉田収庵、緒方洪庵、松本良順、という11名の蘭方医の名前を上げている¹⁶⁾。このうち、明治維新後に私立病院を作った著名な人物で、しかも、その人物の功績により西洋医学が日本に興隆するようになったとすれば、病院経営によって西洋医学普及に力を尽くし、その後の1871年に

山県有朋に薦められて軍医総監となった松本良順がまず第一に挙げられるのである。

第3の根拠としては、新島との接点の問題である。

松本は幕末、幕府の奥医師として將軍家茂の上洛に随行し、会津藩医師の南部精一の仮住まいの家を宿所としている¹⁷⁾。ここで当時京都に滞在し後に新島と結社して同志社をつくった会津藩の山本覚馬と接触していた可能性は高い。また松本は、既述の通り、戊辰戦争の際に会津に応援に行っているので、そこで山本の妹で後に新島の妻となる八重子にも会っているはずである。私の調査では、新島が直接松本と会った記録は見つからないが、このように新島に非常に近い人物と松本には接点があり、松本の名前が彼らから新島の耳に入ることがあったと思われる。

それ以上に、松本に非常に近い人物と新島は何度も会っている。その人物とは、1888年以降、診察を受けた¹⁸⁾「陸軍医」の橋本綱常である¹⁹⁾。

橋本は松本の長崎以来の直弟子であって、1872年、軍医総監であった松本の推薦によってドイツに留学、1885年には、二度目の軍医総監に任ぜられていた松本の推薦により、彼の後任として軍医総監に就任。1887年には、任官されたまま日本赤十字社病院の院長に就いている²⁰⁾。

これは私の仮説だが、橋本が新島を診察する際の雑談として、自分の師である松本から直接聞いた西洋医学濫觴期の苦勞話をしたのではないだろうか。橋本も松本も新島も、広い意味では幕末に蘭学を学んだ仲間であり、当時、蘭学に理解を示さない頑迷な人間が多かったことは医師と患者の立場を超えて二人の共通の話題であったであろう。橋本は、西洋医学を信じようとしないう「不幸ナル」「頑固物」が、松本が診察した結果、一転して松本の西洋医学の信奉者になった人物の話の新島にし、新島は（これは面白い、キリスト教と同じだ）と感じ、説教の材料として使おうと考えたのではないかと²¹⁾。あるいは私の仮説の通りでないとしても、新島演説の冒頭の話の出典は、このような背景によるものであろう²²⁾。

検討が細にわたったが、以上のとおり、私は、新島の本演説の冒頭部分の話は十分信憑性があるものと考えられるのである。

そうなると、本演説稿の本論で述べられている、新島のキリスト教の書

物を読もうとした動機、すなわち、キリスト教を平素憎んでいたためにそれを論破するためであった、という彼の話に異議を唱える理由が無くなる。

しかし、だからといって、それだけでこの動機が本当だとはまだ断言できない。それを判断するには、キリスト教に出会う以前の彼の宗教環境や宗教に対する考え方を検討しなければならない。さらに、我々にはまだ、キリスト教に出会う前の新島が、本当に「豪漫飾非偽善、嫉妬憎悪、放蕩淫乱実ニ慙愧ニ堪ヘサル程」の人間だったのかどうかを検討する作業も残っているのである。

「異教徒」時代の新島襄の宗教体験

キリスト教に出会う以前の新島襄すなわち新島七五三太（しめた）の宗教環境や宗教についての考え方に関して、我々は比較的多くの史料を持っているが、それらを読むと、七五三太がいかに信仰心の厚い家族に囲まれて生活していたかが分かる²³⁾。

七五三太の父民治と祖父弁治は熱心な「偶像崇拜者」であって、祭礼の日には必ず神社にお参りし、家の中にもたくさんの神々や先祖の位牌を祭り、朝にはお茶とご飯を供え、夕方には灯明をあげて、そのたびに深々と頭を垂れ、家族のために祈った。

そのような環境にあって、特に父と祖父の影響を受けて七五三太はごく自然に日本の神仏を信仰するようになった。

たとえば、常に神棚や仏壇に頭を下げる父と祖父の姿に、七五三太は、二人は家族の生命と繁栄とは神仏しだいであると信じており、その信仰は素晴らしいことだと考え、彼もまたしばしば物言わぬ偶像の前に頭を垂れた²⁴⁾。また、数え9歳の時の祖母ますの臨終²⁵⁾の際には、彼女が「ああ、参ります。参ります」と叫んだのを来て、七五三太は祖母が涅槃に入り、慈悲深い仏様のふところに受け止められようとしている、と感じている²⁶⁾。さらに、13歳の時には、剣道の寒稽古の前に水天宮に行き、三本勝負に勝ったらお百度参りをしてお礼をすると誓ったところ、実際に勝てた

ので、几帳面にも百本の紙繕りをつくって水天宮に出かけ、途中で辛くて足が前に進まなくなっても我慢してお百度を踏みさえしているのである²⁷⁾。

このような信心深さは、同時代の若者一般のものだったであろう。七五三太から20歳年下の徳富猪一郎も、少年時に日本の神様に対して願掛けやお百度を行ない、青年になっても御神籤を大事にしまったことを回想している²⁸⁾。ただし、福沢諭吉のように信心が一切なかった若者もいたことにも注意が必要である²⁹⁾。

それでは、キリスト教について七五三太は父や祖父からどう聞かされていたのだろうか。

この点に関して、根岸橘三郎が、その著『新島襄』で重要な記述をしている。七五三太の幼年期、祖父は毎晩、キリシタンに関する物語である「破天連由来之事」や「嚴敷御詮義有之〔厳しく御詮議これあり〕、門徒改宗仰付けらるゝ事」を新島に読み聴かせていたというのである³⁰⁾。

前者について、「破天連由来之事」の「破天連〔パテレン〕」の意味は、本来パードレ (padre)、すなわち、キリスト教の神父や宣教師、転じてキリスト教そのものの意味だが、この物語りでは、「宇留岩破天連」と「富羅天破天連」³¹⁾という、「天を破り、雲に身を連ねる事の自在を得」た「道人〔道教の修得者〕」かつ「破天連宗門」の「根本〔元締め〕」として登場する。

この「宇留岩破天連」と「富羅天破天連」の二人は、「南蛮大王」の住む国から西三十里の距離にある「切支丹」という国に住んでいたが、「南蛮大王」はこの二人に、日本へ渡り、破天連宗門を広めて日本人を帰伏させることを要請する。その後自らが大軍を以って日本を攻め、自国の領土とする野望を遂げようというのである。しかし、日本は「神国仁義之国」なので、なかなか通常のことでは帰伏しないから、策によって手なずける必要があるとして、大王は日本人に送るたくさんの捧げ物を持たせて二人を「南蛮船」に乗せて日本に向かわせた。

これが「破天連由来之事」の内容であって、16世紀後半のスペイン人やポルトガル人渡来の話を西遊記の妖怪物語風に脚色して、キリスト教（カ

トリック) 伝来の理由が日本を侵略するための事前工作だったとする牽強附会の物語である。

一方の「嚴敷御詮義有之、門徒改宗仰付けらるゝ事」は、初期徳川幕府の京都におけるキリシタン弾圧と仏教への改宗強制から島原の乱後のキリシタン滅亡までの事跡を比較的史実に忠実に記したものである。しかし、文章全体を通して、キリスト教の殉教者に対して同情する記述は無く、逆に、彼等を「愚人」「くせ〔者〕」と断言して、改宗しない者は「焼殺し」や「逆磔〔さかさはりつけ〕」、「牛裂〔うしざき〕」、「水責」などの残虐な刑罰で殺されたことを述べる。そして、この文書には、七五三太や弁治が属する安中藩藩主の先祖で京都所司代の板倉伊賀守勝重がキリシタン取り締まりを行い、さらに大久保相模守忠隣(実際は二代将軍秀忠)³²⁾が大弾圧を行ったことも述べる。

さらに、根岸は、安中藩の藩士はキリスト教に対して特別憎悪する感情を抱いていることをうかがわせる記述も行っている。それは、島原の乱の際、藩主の先祖の一族である板倉内膳正重昌(勝重の次男)が天草に出陣し戦死したことである³³⁾。そして、根岸は、重昌出陣の際に將軍の劍術指南役の柳生但馬守が、板倉氏は重任に適した人物ではないと出陣を止めさせようとしたことから、一布衣の身分に過ぎない者が劍術によって、しかも自藩に関係することに絡んで王者の師のようになったことから安中藩士は劍術修行に熱中するようになった、新島もその一人である、という趣旨の記述も行っている³⁴⁾。

ところで、根岸は指摘していないが、実は「破天連由来之事」は、江戸時代の実録(事実を基にした史談)『天草騒動』の冒頭の章である。

『天草騒動』の全巻は早稲田大学出版部蔵、坪内逍遙鑑選の『近世実録全書』に収録されているので³⁵⁾、今、それに沿って実録『天草騒動』の概略を述べれば、日本を征服しようとする南蛮大王(実はポルトガル王)は、日本は武辺に秀でる国だからとして正面から攻めず、バテレンの布教とその医療、さらに彼らを通じて撒き散らす金銀によって日本人を籠絡しようとする。信長の支援もあってその謀略は成功し、九州から西日本においてキリスト教は広がるが、秀吉の時代、白翁という僧侶がバテレンに論戦

を挑んでこれを論破し、奇術がまやかしかしであることを暴く。そのために秀吉は、バテレンの真意が日本の侵略であることを見抜き、バテレンを追放しキリシタン宗門を禁制とする。京都の南蛮寺も破壊されるが、バテレンやキリシタンは九州天草地方に潜伏する。徳川の世となると、大坂の陣で滅んだ秀吉側の残党も九州に落ち延び、彼らは天草のキリシタンを糾合して徳川打倒のために乱を起こす。この天草の乱は拡大し、幕府から追討使に任ぜられた板倉重昌も討ち死にするが、最後には乱は平定されて天下は静謐に治まり、万民安堵の思いを成す、というものである。

この『天草騒動』の概念、すなわち、バテレンの布教は、南蛮諸国すなわち西欧諸国が日本を征服するために行ったというイメージは徳川時代を通じて拡大し、日本人のキリスト教観における一種の固定観念を形成していった³⁶⁾。それは、『天草騒動』にいくつかの異版があり、さらに、明治になってからも、その内容を掲げる本が出版されていることから分かる³⁷⁾。そして、そのようなバテレンの日本侵攻論はあながち根拠のない話でなかった³⁸⁾。

『天草騒動』では、板倉重昌の壮絶な討ち死の有様を「板倉内膳正殿は萌黄緞の鎧に、鋏形打たる龍頭の兜を着し、士卒に下知なし馬を縦横に乗廻して進み給う、何分険しき芝山の事なれば、馬は皆々膝を折りて進み難しと雖も、板倉殿少しも痿まずして真先に進まれける〔略、敵が〕鐵砲追取一匁玉を込めつ、高みより狙ひ澄し、板倉殿馬上に麾を振立て進め進めと山上へ登り接近所を、撞と放せば過たず、板倉殿の胸板へ血煙立て打込んだり、何かは以て堪べき、馬より真逆様に落給へば、家臣等驚き周章早々主人を肩に負て退きけり」と綴る³⁹⁾。

日本の征服を狙うバテレンと幕府の転覆を狙う豊臣の残党、その乱を鎮圧しようとして壮絶な死を遂げた藩主の先祖の一族、このようなストーリーは安中藩の藩士の脳裏に共通して刻み込まれたことであろう。

既述の通り、七五三太の祖父弁治は、毎晩幼い七五三太に上記の「破天連由来之事」、すなわち『天草騒動』や「巖敷御詮義有之、門徒改宗仰付けらるゝ事」を読み聞かせていたと根岸は述べるが、そうであれば、そのこと自体がこれを物語る。話は遡るが、1681（天和元）年、京都所司代板倉

勝重の孫で、島原の乱で討ち死にした板倉重昌の甥の重形は1万5千石を以て安中に封ぜられたが、3年後の1684（貞享元）年に逝去。その跡を養子の重同が継ぐと、翌年、重同は藩内に法度を下知した。その法度の筆頭の第一条が「切支丹宗門惣而御法度之義被仰出御制札弥急度相守若疑敷者於有之者早速可申出事〔キリシタン宗門は総て御法度の義仰せ出さる御高札いよいよきつと相守り、もしこれにおいて疑わしき者は早速申し出るべき事〕」⁴⁰⁾であった。

「おじいちゃん子」⁴¹⁾だった七五三太が、根岸が述べたように、祖父から毎晩のようにこのような話を聞かされれば、彼も自然にキリスト教を憎むようになるのは当然であろう。また、島原の乱の影響で安中藩士が剣術の修行に情熱を燃やしたと根岸が述べていることは、根岸家が代々安中藩の剣術師範を務めていた⁴²⁾ことから事実であろうし、彼が自著の序文で「新島襄先生は私と同郷同藩の先輩であり、略ぼ同じ社会の空気を吸ひ、同じ土壌と同じ歴史の範疇に棲息した方」⁴³⁾と指摘しているように、新島が剣術に熱中したこともそれに関係があるからのように考えられる。

そうであれば、キリスト教の書物に出会った際、これこそ日本を侵略しようとする意図を持ち、かつ藩主の先祖を討ち死にさせた、「平生憎ム所ノキリシタン宗門」であるから「再三復読沈思熟考必ラス其ノ非ヲ看破シテ呉ヘシ」と新島が考えたのも当然であろう。しかも、新島自身が演説稿の中で自分はキリスト教を平素憎んでいた、と語っているわけだから、この部分もまた真実を述べたものと考えられるのである。

新島は、キリスト教に回心した後、安中藩の飯田逸之助に書簡を送るが、その中で彼は、キリスト教は日本で言われるような「魔教」ではないとした上で、プロテスタントとカトリックを峻別し、カトリックは聖教に比べて「甚愚」であると断言する⁴⁴⁾。そして、かつてポルトガル人が日本に伝えたカトリックと現在強大な英、米、プロイセンが信奉するプロテスタントとは全く異なるものだと力説する⁴⁵⁾。彼がカトリックを否定的に捉える深層心理に新島の少年期の宗教体験が影響しているようにも思えるのである。

「豪漫飾非偽善、嫉妬憎悪、放蕩淫乱」は事実か

それでは、新島が演説稿の中でキリスト教に出会う前の自分を回顧して「豪漫〔傲慢〕飾非偽善、嫉妬憎悪、放蕩淫乱実ニ慙愧ニ堪ヘサル程ノ大患」だったと語っていることも事実を踏まえたものであろうか。

これは新島自身が現在の自分の価値尺度に照らして過去の自分の行為を評価して表現した反省の弁であるから、その価値尺度を踏まえないと判断することが困難なものである。卑近な例でいえば、我々が40人クラスのテストで2番の成績を取った生徒に対して優秀であると評価しても、本人が1番を取るつもりであった場合、彼にとってその結果は決して満足できない、むしろ恥ずかしいものなのである。

そのような困難さはあったとしても、彼がキリスト教に回心した後に生活態度が大きく変わったためにその後の新島のイメージからは想像できない回心前の彼の行状というものが、いくつかの資料を見ることによって我々も知ることが出来るのである。

彼が「豪漫〔傲慢〕飾非〔うわべを飾る〕偽善、嫉妬憎悪」と述べた点に関しては、たとえば、彼の妻八重子が新島から直接聞いた話として次のような回想を述べている

襄は四人の女の子の次に生まれたので、おぢいさんからは、随分可愛がられて、なかなか横着な子供でした。〔中略、〕〔ある日、襄が〕家に帰るや、何も云わずに二階へ上って黙って居ります。それがあまりひっそりしていたので、姉が不思議に思って覗きに行くと、襄は一生懸命に、紙縫をこしらえているので

「七五三〔太〕さん、何をしているの」とたずねました。すると襄は

「女てものは黙っているものだ」といったきり、ぷいと家を出て行ってしまいました⁴⁶⁾。

この場面は、前述の、新島が剣道試合の勝利のお礼に水天宮にお百度を踏みに行く話の一部だが、彼は姉に対して男尊女卑そのままの横柄な態度で接していたことが分かる。新島は四人つづいた女子の後に生まれた跡取りなので祖父から甘やかされ、実の姉にも傲慢な態度を示した。八重子は、そんな新島を率直に横着な子供だったと評しているのである。

そのほか八重子は、新島が若い頃、桜田門外の変の際に大老が襲われた重大さを考えずに、転がっている首を見物に出かけようとして祖父に心得違いを諭されたこと、蘭学塾に自分の食事のおかずとして持っていった乾物を猫に取られたので、大変怒ってその猫を殺して、塾仲間とともに猫汁にして食べてしまったことなども回想しているが⁴⁷⁾、これらは偽善や憎悪の例として挙げられるであろう。

偽善といえば、新島が蘭学に熱中しだした七五三太が、藩主や父から命じられていた仕事をわざと怠るようになったことも指摘できるであろう⁴⁸⁾。もっと言えば、彼の脱国の行為自体も、たとえ彼が覚悟を決めて行った行為であっても、国法を破り、家族を捨てたという点で、キリスト教回心後に後ろめたい気持ちが生じたのではないだろうか。とりわけ、もし、その動機が、キリスト教を学びたい、窮屈な世界から抜け出したい、広い世界を自分の目で見たい、という個人的な願望が主であったのならばなおさらである。他の皆は、そう言う願望はあっても係累や国法に縛られて我慢していたのだから⁴⁹⁾。新島は、自分の脱国は国のために行ったものだ、と幾度も述べており、そこには真実も含まれているであろうが、その一方、そう言いきる事で、自分の後ろめたさを紛らわしたとも考えることができるのである。

憎悪に関しては、新島が十四歳の時、藩主の妾某が邪欲だったためにこれを刺殺しようと企てたけれども、同藩の人に戒められて之を中止した話も残っている⁵⁰⁾。これは当時から新島を知る津田仙も語っており⁵¹⁾、当時新島の周辺で相当知れ渡ったことなのであろう。

そして、放蕩淫乱に関しては、若い頃の新島は、その頃の日本の若者としては比較的潔癖だったが、遊郭で遊ぶこともあったし、箱館へ行く際は、歟ヶ崎港で商売女に思い切り大金をふんだくられてもいる⁵²⁾。

以上見てきたとおり、新島が「靈魂の病」の演説稿執筆時に過去を振り返って「『豪漫飾非偽善、嫉妬憎悪、放蕩淫乱実ニ慙愧ニ堪ヘサル程ノ大患』だったと反省したのもそれなりの根拠があるように思える。

罪という靈魂の病

新島は本演説稿で、キリスト教に出会う前の自分は、このような靈魂の病に罹っていたけれどもそれに気がつかなかつたし、それを治してくれる医者もいなかったために、この靈魂の病は日に日に重くなっていった。そんなときキリスト教の書物に出会い、その時はこれを論破してやろうと考えて読み始めたところ、あに凶らんや、その本には宇宙の創造主のこと、「人類ニ罪ト云病アル」こと、その病を癒す力をお持ちになるイエス・キリストがおられることが説かれていて、キリスト教をもっと詳しく研究したい、と思った。そして米国まで飛び出してキリスト教を学び、ヨーロッパも巡って、キリスト教は実に社会を救う真理であり天の道であることを悟り、日本に帰国後は、宣教師の同僚と協力してその布教を行おうと考えたが、それは、キリスト教は実に社会を救う真理であり天の道であると確信する以上に自分自身がキリスト教によって得た恵みが甚だ多く、この利益を広く社会に分け与えたいと思ったからだ、と述べる。

それでは、新島は罪をどう理解していたのであろうか。そしてそれはなぜ人類の病とも言うべきものなのだろうか。

新島は次のように罪には顕在化した罪（「外ニ顕ル、ノ罪」）と心に秘されて顕在化していない罪（「内ニ隠密ニアリ顕レサル罪」）の2種類あると指摘する。

罪ニ二種 外ニ顕ル、ノ罪、内ニ隠密ニアリ顕レサル罪トアリ、外ニ顕ル、罪ハ国ニ政府之法典ノ存アリ克ク之ヲ治御ス、何レ〔ノ〕国ニ於テモ獄ノ設置アルハ已ニ犯セルノ罪アル証トスヘキ也、心ニアリ未タ顕ハ〔レ〕サル罪ニ付テハ如何、縦令或ル人カ密通ヲ企テオルモ若

シ其人カ他人ノ妻ニ通スルノ確証ナキトキハ如何、其ノ人ノ心ノ内ニ
焼ルル如クニ之ヲ思ヒ之ヲ企ツルモ外ニ顯レサレハ政府モ之ヲ罰スル
克〔アタ〕ハス、又妻ノ良夫モ之ヲ知ル能ハス、乍去外ニ顯ハレサル
ヲ以テ罪ナキ人間ト難成、乃チ心之中ニ罪惡ヲ蓄ヘタル惡徒、乃心已
ニ姦淫ノ罪ヲ犯セルモノ也

此所ヨリ之ヲ論スレハ、罪惡ハ行為ニ顯ル、分ハ却テ少ナク、心ニ蓄
ヘアル分ハ甚多ク、今ノ世ノ中ノ人ヲ考ヘ〔レ〕ハ滿天下心ニ罪惡ヲ
犯サル、モノハ殆アルマシト云フトモ可ナラン、蓋シ心ノ罪タルヤ孔
子釈伽之如キ人物デスラ亦或ハ罪ナキ能ハサルナランカ、況〔ヤ〕我
輩平凡ノ人間ニ於テ〔オ〕ヤ、然シ吾カ此聽衆ニ向ヒ君等ノ尽ク罪人
ナリト云フニハアラス、中ニ或ハ予ハ罪ノ何ニタルヲ知ラス、又心ニ
罪ヲ犯セシ事モナキモノナリ〔ト〕云ハル人モアラン、予ハ此夕君等
之心ノ罪ノ吟味〔ニ〕來ルニアラス、又人ノ心ノ事ハ争〔イカデ〕カ
予之カヲ以テ知り得ヘキモノゾ、乍去君等モ世間ニ罪惡ノアルト云事
ハ慥〔タシカ〕ニ証セラル、ナラン、日々發兌〔ハツダ、発行〕ノ新
聞ヲ見ラレヨ、一トシテ罪惡ニ関スル事ノ記セサルルナキハ是人類ニ
罪惡ノ現ニ行ル、実証ナリ⁵³⁾

なぜ人間は、神の意に沿わずにこのような罪を犯すのだろうか。新島
は、それは人間には「我意」があるからだとして、こう述べる。

神ノ聖旨ノ成ラサル所謂ハ人間ノ我意ヲ先ニシテ神ノ聖旨ヲ奉セサ
ルニヨル⁵⁴⁾

人各我意ヲ先ニシテ他人ノ忠告ヲ容レス、又人心ニ銘セル天ノ命、
天ノ規律乃真神ノ聖旨ニ従順ナル能ワサルヲ示スナリ⁵⁵⁾

「我意」とはなによりも自分の考えを押し通そうとする心である。人間
は我意を優先させるために心の中で命じる天の命令、真神の聖旨に従順に
なれないのだ、そう新島は断言する。

北垣宗治先生が敬和学園大学学長時代に行われた説教の中に次の言葉が

ある。

キリスト教の真理がいちばんきびしく糾弾するのは、私たちが日常の言葉においても行動においても、自分自身を中心に生きているということでもあります。そして、この自己中心主義こそが、最も普遍的な意味における罪なのであります⁵⁶⁾。

新島が指摘する「人類ノ罪ト云フ病」とは、現代にも通じる普遍的なものなのである。

注

- 1) ただし、キリストは誰か、というキリストの人格論と、キリストの意義すなわちキリストの業（わざ）の議論とは有機的な関係がある。なぜなら、「イエス・キリストが誰であるかということは、彼の救いの働きにおいて知られる」（メランヒトン）からである（アリストター・E. マクグラス『キリスト教神学入門』（教文館、2002年）473頁 参照）。
- 2) 現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』（丸善、2000年）に収録（3～26頁）。
- 3) 前掲書50～56頁。
- 4) 『新島襄全集』2（同朋舎出版、1983年）390～392頁。以下、本文に引用する演説稿はこれに拠る。なお、『新島襄 教育宗教論集』（岩波文庫、2010年）にも本稿が収録されている。
- 5) きやくせつ。「さて」、「ところで」の意味。
- 6) 新島研究の「顕彰」派と「検証」派のふたつの流れについて論じたのは本井康博教授である。詳しくは同教授著「新島研究の系譜と動向」（伊藤彌彦編『新島全集を読む』（晃洋書房、2002年））参照。
- 7) 新島研究者が考える新島の脱国の主要な理由として注目されるのは、伊藤彌彦教授が指摘される「脱檻」（窮屈な世界からの脱出）による、とするものである。同教授著『のびやかに語る新島襄と明治の書生』（晃洋書房、1999年）参照。
- 8) 太田雄三氏は著書『新島襄』において、新島の脱国の理由について、彼の父民治氏

あての1866年2月21日付の手紙で、その宗教的動機を述べずに「国家のため」に行ったことを強調していることを指摘し、「結局、新島が自分の脱国を日本人に向かつては自分の国家のために尽くしたいという思いを強調し、欧米人には聖書を学びたいといったキリスト教的動機を挙げて説明しているのは、「方便」を用いたという面がある」、「新島には相手によって一つのことを違うように説明するという方便をもちいることを辞さないところがあった」と断言している（太田雄三『新島襄』（ミネルヴァ書房、2005年）43～44頁）。

しかし、上記の民治宛書簡の翌年に新島が民治に書き送った書簡（1867年3月29日付）では、ハーディーから、どんな希望を抱いてアメリカへ来たのか、と問われて「唯々種々の学科且聖教を修行仕、国家の為万分の力を竭さんと存し」と答えたことと記して、自分は種々の学科に加えてキリスト教（「聖教」）の修行のために渡米したとハーディーに述べたことを父に伝えており、また、ハーディーが自分を世話してくれる理由は、彼がそれを「全天上独一真神への勤め」と考えているからだと言明して、キリスト教について詳しく解説して民治に神へ祈ることを奨めている（『新島襄全集』3（同朋舎出版、1987年）32頁）。

さらに、新島の民治宛の1866年の書簡は、脱国後の彼が初めて父に書き送ったもので、箱館以後の自分の消息を伝える一方、現在は「学問専一」のために帰国するつもりは無く「数年之間小子は無きものと」諦めて待っていて欲しい、と願うのが趣旨の書簡である（前掲『新島襄全集』3 27～28頁）。新島は安中藩士の民治にとって総領（家を継ぐ男子）の地位にあり、民治としては当然一刻も早く帰ってくることを望んでいるはずだが（民治が弟双六の総領願を藩に提出したのは1868年になってからである）、新島はそんな父の期待を裏切ることを述べているわけである。加えて当時は、幕府によってキリスト教は非常に厳しく禁ぜられている時代であったから、新島としては、父の帰国に対する期待にも背いた上に国禁のキリスト教を研究するために国禁の国抜けを行った、と民治にいきなり述べるのは父を苦しめるものだ、という配慮は働いたはずである。しかし、それでも新島は、この書簡の中で、あえてキリスト教の神のことに触れ「日本の木像金仏とはちか〔違〕ひ世界人間草木鳥獣をつくりし神にて永生不朽、実に我等之尊敬祈禱すへき神なり」と述べて、民治にキリスト教に帰依したことをやんわり伝えている。

したがって、このような事実から考えれば、新島の民治宛の上記書簡を元に、新

島は脱国の動機に関して欧米人にはキリスト教的動機を上げ、日本人にはその動機を述べずに国家のたを強調している「方便」家である、と断言する太田氏の批判は正鵠を得ないものである。

なお、太田氏は「方便」の言葉の定義を述べないまま「目的のために利用する便宜の手だて、計略」の意味で使用しているようだが、「方便」はもともと仏語で、「衆生を真的教え導くために用いる巧みな手段」の意味であり、これに関係して「機に因りて法を説け」、「人を見て法を説け」という諺もある。私は、この意味において新島は「機に因りて法を説く」、「人を見て法を説く」傾向のある人物であったと考えている。

- 9) たとえば、マタイによる福音書9章12節、マルコによる福音書2章17節、ルカによる福音書5章31節。イエスが大勢の病人を癒したこと自体も、人間の罪の救済を暗示するものだが、ここではその指摘だけに留める。
- 10) ただし、「脱国の理由書」では「ある日友人を訪ねると、彼の書齋で聖書を抜粋した小冊子を見つけた。〔略〕私はそれを彼から借り、夜に読んでみた」と記述しており（前掲『現代語で読む新島襄』54頁）、「私の青春時代」では友人が貸してくれた書物の中に「上海から香港で発行されたキリスト教に関する二、三の書物」がたまたま混じっていたことを記している（同書16頁）。すなわち、キリスト教の書物を友人から借り受けたことに関して、「私の青春時代」では、より偶然性が高い表現を、「脱国の理由書」では、それよりも自らの意思を強く押し出した表現を行っている。

どちらが実際の状況を表しているのか今となっては不明だが、少なくとも友人がたまたま所有していたキリスト教の書物を借り受けた新島が強い意思をもってそれを読んだ事実は変わらないだろう。ただ、ここで問題になるのは、その意思とは、キリスト教を学びたい、という意味なのか、逆に、キリスト教を論駁したい、という意味なのか、いずれであったのか、である。

- 11) 松本良順については、前田宣裕『会津戦争の群像』（歴史春秋社、1996年）、および吉村昭『暁の旅人』（講談社文庫、2008年）、『松本順自伝、長与専斎自伝』（平凡社東洋文庫、1980年）等を参照。
- 12) 「蘭疇」は松本の雅号。
- 13) 吉村前掲書306頁。

- 14) 岩波書店編集部編『近代日本総合年表』（岩波書店、1968年）58頁。
- 15) 『新島襄全集』5（同朋舎出版、1984年）301頁。
- 16) 矢田挿雲『江戸から東京へ』（五）（中公文庫、昭和50年）24～25頁。
- 17) 吉村前掲書137頁。
- 18) たとえば、『新島襄全集』8（同朋舎出版、1992年）439,440、451,569頁。『新島襄全集』3 581頁。
- 19) 前掲『新島襄全集』5 300頁。橋本綱常（1845～1909）については、新島の研究書でもあまり触れられていないのでここでその人物について簡単に説明したい。彼は越前藩医橋本家の人で橋本左内の末弟である。本来、左内が藩医を継ぐべきであったが、彼が御書院番に任じられたため、綱常（幼名破魔五郎）が自ら医者を嗣ぐことを申し出る。1862年に長崎に留学し、ボンペの高弟松本良順について蘭医学を学ぶ。良順が江戸に帰ると綱常も付き従い勉強を続けた。戊辰戦役では負傷者の治療に当たる。1872年、当時軍医総監だった松本の推薦でドイツへ留学。1883年には大山巖陸軍卿の随員としてヨーロッパに渡り、万国赤十字条約加盟のために尽力。1885年、二度目の軍医総監となっていた松本の推挙により彼の後任として第四代軍医総監に就任。ついで陸軍省医務局長に任ぜられた。1887年には日本赤十字社病院の初代院長となる。東大教授を兼任。医学博士。以上は、白崎昭一郎「西洋文化との出会い 第11回橋本綱常」（『グラフフクイ』平成16年3月号（福井県）10～11頁）より。
- 20) 前掲書11頁。吉村の前掲書には、幕府が最初につくった西洋医学の病院が、もともと貧しい人々を治療する「養生所」としてつくられたために、そこで医師を務めていた松本も身分に関わりなく患者を治療していたことを述べている（同書79～80頁）。橋本もまた謙虚な人柄で、維新後に松本がつくった蘭疇舎では、自身は兵部省勤めにもかかわらず、松本が不在のときに代診を務め、時間があるときには診察に従事したという（同書305頁）。

1888年4月、在京の新島は東京大学医学部のベルツの診察を受けるために森文部大臣にその紹介を依頼した直後、ベルツの診察を受ける前に「橋本陸軍医ニ診察ヲ乞フ」ている（前掲『新島襄全集』5 300頁）。この事実だけを捉えると、新島がなんとなく名医の二人に対して二股をかけたような印象が残り、そのためであろうか、太田雄三氏は前掲書で、新島は「まるで自分自身が上流階級の一員であるかの

ように、東京大学教授ベルツ、陸軍軍医総監橋本綱常といった当時上流階級の人々の間で最も頼りにされていた名医の診断を受けている」と指摘している（渡辺前掲書360頁）。しかし、事実としては、橋本は日赤病院長でもあったので、だれでも橋本が在院のときに同病院に行けば診察を受けられた。米国滞在以来西洋医学に慣れ親しんでいた新島はおそらく、森にベルツの紹介を依頼したものの、彼がいつ診察してくれるが不明の中で病状苦しく、日赤病院に橋本を訪ねたのであろう。そして当時、橋本は軍医総監も兼任していたので、新島は敬称の略称として「橋本陸軍医」と記したのであろう。「診甚悪シ」という橋本の診断結果がそれを物語る。なお、橋本は1890年に日赤病院長に専念するとなり、石黒忠則が第5代軍医総監に就任している。

- 21) もしそうであるなら、新島のこの演説稿の執筆年月は不明とされているが、橋本軍医に診察を受けた1888年4月以降となる。
- 22) なお、松本順は1884年以降、神奈川県大磯を海水浴と保養の地として注目して初めて宣伝した人物である。その効があつて、1887年の横浜、国府津間の鉄道が開通すると、大磯に海水浴に行く者が増え、それに伴って政財界の実力者が競うように別荘を建て、松本もまた同様であった（吉村前掲書330頁）。橋本もまた大磯に別荘を構えていた（『新島襄全集』4（同朋舎出版、1989年）332頁）が、それはおそらく恩師の松本にならったもので、同所で恩師と旧交を温めたことであろう。前橋で発病した新島が、病を養いに大磯に移り年を越したとき、橋本もまた大磯に滞在していたので、新島の診察を行っている。
- 23) 以下、主に前掲『日本語で読む新島襄』（4～6頁）参照。
- 24) 前掲書6頁。
- 25) 前掲『新島襄全集』8 5頁。
- 26) 前掲『日本語で読む新島襄』4～6頁。
- 27) 永澤嘉巳男編『新島八重子回想録』（同志社大学出版部、昭和48年）108～110頁。なお、当時の水天宮は有馬屋敷内にあった。
- 28) 徳富蘇峰『蘇峰自伝』（中央公論社、昭和10年）697頁。
- 29) 福沢は子供の頃、神様の名のあるお札を踏んだり、それを便所で汚したりして神罰が下るか実験をしたり、稲荷神社のご神体を調べたら石や木の札だったのでそれを捨ててしまうなどの悪戯をして一人喜んでたという。『新訂福翁自伝』（岩波文

庫、1978年) 22～23頁。

- 30) 根岸橘三郎『新島襄』（警醒社書店 大正12年）。2つの文書は同書31～36頁に掲げられている。本文の以下2文書の概要紹介の出典は同頁による。
- 31) 「富羅天破天連」の「富羅天」は「天麩羅」をもじった言葉なのであろう。「宇留岩破天連」の「宇留岩」は、ポルトガル語のirmão（イルマン）、すなわちパードレの下位の地位にある平修道士のことである。
- 32) 六条河原から七条河原(現在の正面橋辺)で52人の信者が焼き殺された元和キリシタン殉教事件（1619年、元和5年）。ただし、事実としては、大久保忠隣はそれ以前に失脚しており、火あぶりを命じたのは上洛していた將軍秀忠本人。板倉勝重はなるべく厳刑を用いない方針だったが、それを知った秀忠が激怒して命じたという（矢田挿雲『江戸から東京へ』（八）（中公文庫、昭和50年）118～121頁）。根岸によると、新島は幼年期に祖父からこの話も記載された物語を聞かされていることになるが、そうだとすると後年自分が京都に住むことになって、新島がこの話を思い出したのかどうか、どう感じたかは記録に見当たらず不明である。
- 33) 根岸前掲書78頁。
- 34) 前掲書同頁。
- 35) 『近世実録全書』第12巻（早稲田大学出版部、昭和4年刊）。
- 36) 松田毅一『南蛮のパテレン 東西交渉史の問題を探る』（NHKブックス122 昭和45年）167頁。
- 37) たとえば、明治になってから出版された吉田嘉雄編輯『敬天愛国日本魂耶蘇退治』（松延堂大西出版、明治18年）は、『天草騒動』に基づくものだが、早稲田大学版とは細部が異なる異版である。根岸が自書で紹介したものも、この二つと細部が異なる。
- 38) 松田前掲書、高瀬弘一郎「キリシタン宣教師の軍事計画」『キリシタン時代の研究』（岩波書店、1977年）、神田千里『島原の乱 キリシタン信仰と武装蜂起』（中公新書、2005年）等参照。
- 39) 前掲『近世実録全書』第12巻 156～157頁。
- 40) 『安中市誌』（安中市誌編纂委員会、昭和39年）252頁。
- 41) 本井康博『新島襄を語る（一）千里の志』（思文閣出版、2005年）16頁。
- 42) 根岸前掲書77～78頁および前掲『安中市誌』189～190頁。

- 43) 前掲書1頁。
- 44) 『新島襄全集』(3) 53頁。
- 45) 前掲書88～89頁。
- 46) 前掲『新島八重子回想録』108～109頁。
- 47) 桜田門外の変に関する新島のエピソードは前掲書121～122頁。猫汁の話は同書120頁。
- 48) 前掲『現代語で読む新島襄』13頁。
- 49) ここで考えるべきは、新島が箱館で知り合った友人たちのことである。彼らはせいっぱい新島の脱国を支援しているが、誰一人それが違法だからとして新島の脱国を止めさせようとした形跡がない。新島も当時は国法を破ることにそれほど罪悪感を感じていないし、国法を破る以上もう日本に帰れない、という悲壮感もない。逆に、その前後に、やがて帰国することを前提にしている幾つかの詩も残している。

この疑問を解く鍵が新島の周辺にいたジョン万次郎だと私は考えている。新島は、日本を脱出して海外で学ば、いずれ万次郎のように帰国して活躍できると考えて脱国を決意したのであり、新島の友人たちも、自分も海外留学をしたいがとてもそんな勇気がないので、せめて新島を応援しよう、と考えていたと思われる。このことについては稿を改めて論じたい。
- 50) 前掲『新島八重子回想録』113ページ。
- 51) 和田洋一『新島襄』(日本基督教団出版局、1973年)75頁。
- 52) 前掲書74頁。なお、本井教授の論文「新島襄をめぐる女たち－江戸における女性交遊－」(『新島襄を語る(七) ハンサムに生きる』(思文閣出版、2010))参照。
- 53) 前掲『新島襄全集』(2) 336～337頁。
- 54) 前掲『新島襄全集』(2) 23頁。
- 55) 前掲書24頁。
- 56) 北垣宗治『大学は面白いところ』(考古堂書店、2001年)150頁。

参考文献

- アリスター・E. マクグラス『キリスト教神学入門』(教文館、2002年)
現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』(丸善、2000年)

『新島襄全集』2（同朋舎出版、1983年）
同志社編『新島襄 教育宗教論集』（岩波文庫、2010年）
伊藤彌彦編『新島全集を読む』（晃洋書房、2002年）
伊藤彌彦著『のびやかに語る新島襄と明治の書生』（晃洋書房、1999年）
太田雄三氏『新島襄』（ミネルヴァ書房、2005年）
『新島襄全集』3（同朋舎出版、1987年）
前田宣裕『会津戦争の群像』（歴史春秋社、1996年）
吉村昭『暁の旅人』（講談社文庫、2008年）
『松本順自伝、長与専斎自伝』（平凡社東洋文庫、1980年）
岩波書店編集部編『近代日本総合年表』（岩波書店、1968年）
『新島襄全集』5（同朋舎出版、1984年）
矢田挿雲『江戸から東京へ』（五）（中公文庫、昭和50年）
『新島襄全集』8（同朋舎出版、1992年）
『グラフィクイ』平成16年3月号（福井県）
『新島襄全集』4（同朋舎出版、1989年）
永澤嘉巳男編『新島八重子回想録』（同志社大学出版部、昭和48年）
徳富蘇峰『蘇峰自伝』（中央公論社、昭和10年）
福沢諭吉『新訂福翁自伝』（岩波文庫、1978年）
根岸橘三郎『新島襄』（警醒社書店 大正12年）
矢田挿雲『江戸から東京へ』（八）中公文庫 昭和50年）
『近世実録全書』第12巻（早稲田大学出版部、昭和4年刊）
松田毅一『南蛮のパテレン 東西交渉史の問題を探る』（NHKブックス122 昭和45年）
吉田嘉雄編輯『敬天愛国日本魂耶蘇退治』（松延堂大西出版、明治18年）
高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』（岩波書店、1977年）
神田千里『島原の乱 キリシタン信仰と武装蜂起』（中公新書、2005年）
『安中市誌』（安中市誌編纂委員会、昭和39年）
本井康博『新島襄を語る（一）千里の志』（思文閣出版、2005年）
和田洋一『新島襄』（日本基督教団出版局、1973年）
本井康博『新島襄を語る（七）ハンサムに生きる』（思文閣出版、2010年）
北垣宗治『大学は面白いところ』（考古堂書店、2001年）